

「ともに」「さまざまな」声をだす ——対話的能動性と距離

桑野 隆 早稲田大学教育・総合科学学術院
Takashi Kuwano Faculty of Education and Integrated Arts and Sciences, Waseda University

要約

バフチンには、『ドストエフスキイの創作の諸問題』(1929)とその改訂増補版『ドストエフスキイの詩学の諸問題』(1963)という2つのドストエフスキイ論がある。本稿では、これらの著書およびその周辺の著作を比較検討することにより、主として〈ポリフォニー〉、〈対話〉、〈声〉に関する見解の変化を確認することにした。その結果、1920年代後半から30年代半ばまでに目立つ「社会(学)的」視点が1960年前後の著作には見られないこと、また1920-30年代にはもっぱら「さまざまな声があること」を強調していたのに対して、1960年前後には「ともに声をだすこと」をも重視しはじめていることが、明らかになった。さらには、『ドストエフスキイの詩学の諸問題』では、〈ポリフォニー〉や〈対話〉こそが他者に対する格別の「能動性」を必要とすることが繰り返し強調されていることも再確認できた。こうした点を考え合わせると、バフチンの対話原理の要点は、「距離」を確保した「対話的能動性」を身につけてはじめて「心に染み入る対話」も可能になるとの主張にあるといえよう。

キーワード

ポリフォニー、対話、「ともに声をだすこと」、「さまざまな声があること」、2つのドストエフスキイ論

Title

Concordant and Diverse Voices: Appropriate Distance is Indispensable to Dialogic Activity

Abstract

In this essay, I compare Bakhtin's works of the late 1920s and 1930s, particularly *Problems of Dostoevsky's Art* (1929), with his works of the early 1960s, particularly *Problems of Dostoevsky's Poetics* (1963), in order to re-evaluate the dynamics of his notions of polyphony, dialogue and voice. In this regard, the comparison shows that there are substantial differences between these texts. First, the sociological line of reasoning that was remarkable in the late 1920s and 1930s is suppressed in the works of the early 1960s. Second, while in the late 1920s and 1930s Bakhtin laid stress on the importance of *raznoglasié* [diverse voices], by the early 1960s he came to regard *soglasie* [concordant voices] as important as *raznoglasié*. It should also be added that the significance of dialogic activity in polyphony and dialogue is emphasized throughout *Problems of Dostoevsky's Poetics*. All of these observations make it clear that the point of Bakhtin's dialogism is that access to penetrative dialogue is possible only by dialogic activity that maintains appropriate distance.

Key words

polyphony, dialogue, 'soglasie', 'raznoglasié', Bakhtin's Dostoevsky texts

はじめに

ミハイル・バフチン（1895-1975）は、マルティン・ブーバー（Martin Buber, 1878-1965）をはじめとする「対話の哲学」者たちのひとりであった。だがそれと同時に、バフチンは、「対話の哲学」者の多くとはちがって、その対話原理を文学研究、言語論、心理学、文化論その他の領域にも適用していった。バフチンが広く注目されるに至ったのも、後者の点に負うところが大きい。

しかし本稿では、バフチンの対話原理そのものを改めてとりあげることにしたい。具体的には、〈ポリフォニー〉と〈対話〉といったすでに広くとりいれられている概念の再検討と、〈soglasie 「同意」「ともに声をだすこと」〉、〈raznoglasie 「不一致」「さまざまな声があること」〉などの〈golos あるいは glas 「声」〉に関連するいくつかの語どうしの関係の検討を中心に進めていく。中心的にとりあげる著作は、『ドストエフスキイの創作の諸問題』（1929）とその改訂増補版『ドストエフスキイの詩学の諸問題』（1963）である。その他の著作についても触れるが、主としてこの2つのドストエフスキイ論のあいだの共通点と差異に注目することにする。日本語や英語には『ドストエフスキイの詩学の諸問題』だけが訳されているため、『ドストエフスキイの創作の諸問題』との違いが軽視されがちであるが、これらの著書のあいだには、『ドストエフスキイの詩学の諸問題』でカーニバル論が新たに加わったという一目瞭然の点以外にも、看過しがたい補正や追加、削除が見られる。

1 ポリフォニー

まずは、バフチンのいう〈ポリフォニー〉とはいかなるものであったのかを確認することにしてしよう。バフチンがポリフォニー論を展開したのは『ドストエフスキイの創作の諸問題』が最初である。音楽用語から借用したこのポリフォニーという言葉は、昨今ではさま

ざまな文化領域で使われているが、バフチン自身は小説の形式を比喩的に示すためにのみ用いていた。のちに『ドストエフスキイの詩学の諸問題』の結語において、「小説というジャンルを超えた特殊なポリフォニー的芸術的思考という問題を直接に問題にすることもできるように思われる」とも述べてはいるが（Bakhtin, 2002b, p.298）、その場合にしても依然として詩学の問題にとどめている。

すなわち、バフチンのポリフォニー論は、その数年前から形成されつつあった独自の対話原理を文学に適用した場合に「見いだされた」芸術原理であった。ただし、対話原理のほうも、ドストエフスキイのポリフォニー小説をとおして初めて十分な展開の機会を得ている。「ドストエフスキイは、社会生活や人間の生活がもともと対話的であることを明らかにした」（Bakhtin, 1996b, p.357）。（下線部は原文では強調箇所。以下も同様）

その意味では、ポリフォニーと対話は不即不離の関係にあるわけであるが、ここではひとまず対話とは分けて、もっぱらポリフォニーに関して述べているドストエフスキイの見解を追ってみよう。『ドストエフスキイの創作の諸問題』の冒頭近くにはつぎのような「定義」がある。

自立しており融合していない複数の声や意識、すなわち十全な価値をもった声たちのポリフォニーは、実際、ドストエフスキイの長編小説の基本的特性となっている。作品のなかでくりひろげられているのは、単一の作者の意識に照らされた、単一の客観的世界のなかの運命や生の集合ではない。そうではなく、ここでは自分たちの世界をもった複数の対等な意識こそが、みずからの非融合状態を保ちながら、組み合わせあって、或る出来事という統一（性）をかたちづくっているのである。……主人公の意識は、作者の意識とは別の意識、他者の意識としてあたえられているが、同時にまたそれはモノ化されておらず、閉じられておらず、作者の意識のたんなる対象にはなっていない。（Bakhtin, 2000, p.12）

ここで重要なのは、たんに声や意識が「複数」あるということではない。肝心なのは、作者と主人公が「対等な」関係にあること、彼らの声が「融合してい

ない」こと、そしてそうした声や意識が組み合わさって統一体をなしているということである。この「融合していない」という言葉は、バフチンがポリフォニーを語るときにほぼ決まって出てくる²⁾。あとで見るように、バフチンにおいては、「同意」と訳されることの多い *soglasie* にしても、「融合していない」、すなわち「同一」ではない。

ちなみに、作者と主人公が対等であることの重視を踏まえるならば、ロシア語にとっては外来語である *polifoniia* は「ポリフォニー」と訳し、その敷き写しともいえる *mnogogolosost'* (*poli*→*mnogo*, *foniia*→*golosost'*) には「多声(性)」という訳をあてるのが、適切であろう。バフチン自身も基本的に両者を区別している。「ポリフォニー小説の本質的な多次元性と *mnogogolosost'*」(Bakhtin, 2000, p.27) や「ドストエフスキイの時代の客観的な複雑さ、矛盾、*mnogogolosost'*」(Bakhtin, 2000, pp.39-40) といったように用いており、*mnogogolosost'* には「たくさんの声があること」という意味はあっても、そこには作者と主人公の関係が入っていない³⁾。

より本質的なのは、声の複数性ではなく、作者と主人公のあいだの距離のとり方なのである。この関連では、『ドストエフスキイの詩学の諸問題』で、上記の「定義」の直前に、「ドストエフスキイは……声なき奴隷たちを創造したのではなく、みずからの創造者と並び立って、創造者に同意しないし反抗さえもしかねない力をもった、自由な人間たちを創造したのである」と追加していることも注目されよう (Bakhtin, 2002b, p.10)。「対等」、「非融合」に「自由」が付け加えられているのである。ここには、1930年代後半にほぼ完成していたとされるカーニバル論の影響も感じられる。

ともあれ、このようにポリフォニーは、「自立」立っていて「融合していない」「自由」な「声」たちからなるわけであるが、と同時に、声たちは分散状態にあるわけではなく、「組み合わせあって、或る出来事⁴⁾という統一(性)をかたちづくっている」(Bakhtin, 2000, p.12)。ただし、ここでいう「統一(性)」は、「高次の統一性、いわば第2レベルの統一性、ポリフォニー小説という統一性」(Bakhtin, 2000, p.23) である。あるいはまた、「ポリフォニーの芸術的意志とは、複数

の意志の組み合わせへの意志であり、出来事への意志である」(Bakhtin, 2000, p.29) といった言い方もしている。このように「統一(性)」や「組み合わせ」が強調されていることからもうかがえるように、ポリフォニーはたんなる脱中心的志向とは同一視できない。

もっとも、実際にはバフチンはこの「統一(性)」の具体例を明確に提示しないままに終わっている。このことがロシア正教徒バフチンと思想家バフチンとのあいだの揺れに関係するか否かはさておき、バフチンが社会評論家ドストエフスキイと芸術家ドストエフスキイの違いを何度も断っていることは興味深い。要するに、芸術家としてのドストエフスキイには、社会評論家としてのドストエフスキイに見られるようなモノローグ的な面や「和解」をめざす面がなく、「ドストエフスキイの長編小説のレベルで展開されているのは、和解した声たちのこうしたポリフォニーではなく、闘争しており内的に分裂している声たちのポリフォニーなのである」というのである (Bakhtin, 2000, p.153)。

総じて、バフチンはとりわけ 1920 年代後半から 30 年代末くらいまでは「さまざまな声があること」を前面に押しだしていたのに対して、『ドストエフスキイの詩学の諸問題』を出す準備に入った 1960 年前後からは、「ともに声をだすこと」の可能性も探っていた。この点についてはあとで触れることにするが、『ドストエフスキイの創作の諸問題』の段階ではまだ「衝突」や「分解」をひたすら強調している。『ドストエフスキイの詩学の諸問題』では全面的に書き換えられている「結語」部分では、つぎのように述べられていた。

作品の各要素は、声たちが交差しあう点、方向を異にする 2 つの応答の言葉が衝突する場所にあられざるをえない。この世界をモノローグ的に秩序づけようとするような作者の声は、存在しない。作者の志向は、この対話的分解に人びと、イデー、モノの確固たる定義を対置するのではなく、それどころか、衝突しあった声をまさに激化させるほうに……向かっている。融合していない声たちの組み合わせが自己目的、最終的所与となっている。……作者は、各主人公のそれぞれの自己意識に、その者に関する、その者を外部から包み閉じ込めるような自分の意識ではなく、それと

の緊張した相互作用のなかでくりひろげられる複数の他の意識を対置している。これが、ドストエフスキのポリフォニー小説なのである。(Bakhtin, 2000, p.175)

かくして、バフチンは、ドストエフスキが従来のモノロギックなタイプの作家とは根本的にちがった独特の芸術的思考をもっていたことを力説したわけであるが、これに対する当時の批評は総じて芳しいものではなかった。また、バフチン自身も自著の刊行直前に逮捕され、やがて流刑の運命となる。

その後のバフチンは、研究の中心をドストエフスキから外し、小説の言葉一般やカーニバル論に取り組んでおり、1940年には長大な学位論文『リアリズム史上におけるラブレー』を提出する。1965年刊の『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』は、これを基にしたものである。バフチンが1940年代後半にドストエフスキ論に再び着手したのも、このラブレー論で展開したカーニバル論でもって補強しようとの意図があつたこととされているが、実際には、改訂増補版の出版の可能性がでてきた1960年前後から、ポリフォニーや対話に関しても大幅な追加、修正を図っている⁵⁾。

『ドストエフスキの詩学の諸問題』でまず眼を引くのは、ポリフォニー小説が「完結不能な」ものであることを繰り返し述べる一方で、ポリフォニーこそがもっとも対話的であることを強調していることである。

ドストエフスキのポリフォニー小説における主人公に対する作者の新しい芸術的立場とは、真摯に実現され最後まで推し進められた対話的立場であり、こうした立場が主人公の自立性、内的自由、未完結性、未決定性を保証している。(Bakhtin, 2002b, p.74)

すなわち、ポリフォニーでは「作者の死」が生じるのではなく、むしろポリフォニーにおいてこそ作者はひととき「能動的」なのである。むしろ、それはモノロギックな能動性ではなく、「対話的能動性」であり、それだけに大変な緊張を要する。そうした能動性が弱まるやいなや、主人公は硬直化しモノ化しはじめる。「ポリフォニー小説の作者に要求されるのは、自分自

身や自分の意識を捨てることではなく、その意識を（ただし、一定の方向においてであるが）とてつもなく広げ、深め、つくり変えて、他者の十全な権利をもった意識たちを収容できるようにすることなのである」(Bakhtin, 2002b, p.80)。

また、興味深いことに、このすぐあとの箇所では、小説に限定していたはずのポリフォニー論が、小説というジャンルの枠を超えて生そのものに及んでおり、こうした対話的能動性は「生そのもののポリフォニック性格」を「芸術的に再現するのに不可欠なことであつた」とも述べられている(Bakhtin, 2002b, p.80)。さらに注目すべきは、このように作者には意識の広がり、深まり、変化が要求される一方、「ほんものの読者」もまた新たな経験をするとの指摘である。

ドストエフスキのような新たな作者の立場にまで高まりうる能力をもったほんものの読者なら誰しも、自分の意識のこうした独特な能動的拡大を感じる。それは、新しい客体の獲得という意味においてではなく……まず第1に、他者の十全な権利をもった意識と対話的に交通し、人間の完結不能な深みへと能動的に対話的に染み入っていくといったようなことを初めて経験するという意味においてである。(Bakhtin, 2002b, pp.80-81)

読者もまた、意識の広がり、「対話的能動性」を体験しうるのだというのである。作者と主人公のあいだだけでなく、読者にもポリフォニー体験が可能であるというこうした言い方は、バフチンがあらかじめ断っていた小説ないし詩学という枠を超えかけている。こうした流れの延長でつぎのようにまとめているのは、もはや生き方そのものについて述べているかのようだ。

ポリフォニックなアプローチは、(教条主義や)相対主義とはなんら関係がない。教条主義も相対主義も、あらゆる議論、あらゆる対話を排除しており、そうしたことを不必要なものとしたり(相対主義)、不可能なものにしている(教条主義)。(Bakhtin, 2002b, pp.80-81)

『ドストエフスキの詩学の諸問題』で加わった点はほかにもいくつかあるが、もうひとつだけあげると

なれば、それは「メタ言語学」の提唱であろう。この点は、すでに覚書「テキストの問題」(1959-60)において、「個々の発話をも内部から貫いている、発話どうしの対話的關係は、メタ言語学に属している」(Bakhtin, 1996b, p.321)と述べられているが、ポリフォニー論を補強するためにこのように「メタ言語学」を導入したのは意味深長である。

ポリフォニー小説においては、たしかに言語の多様性やことばによる性格づけの意義は保たれてはいるものの、その意義は減少しており、肝心なことに、そうした現象の芸術的機能が変化している。……問題は、それらが作品のなかでどのような対話的角度的もとに対照されたり対立させられたりしているかということにある。……(話者と自分自身の言葉との対話的關係もふくむ)対話的關係は、メタ言語学の対象である。(Bakhtin, 2002b, p.204)

ここで「メタ言語学」ということで念頭におかれているのは、1920年代後半に『マルクス主義と言語哲学』(バフチン, 1989/1929)をはじめとするヴォロシノフ名の著作で展開していた「発話の言語学」そのものにほかならない。その意味では、おなじ1929年に出ていた『ドストエフスキイの創作の諸問題』と『マルクス主義と言語哲学』が再会したかたちになっている。総じて、バフチンといえ、まずは文学論が想起されがちであるが、実際には、ほぼ一貫して言語論にもかかわっており、30年代以降も同時代の言語学の動きを追っていたことも忘れてはならない。

2 対話

つぎに、ポリフォニー論の背景にあるともいえる対話論、対話原理を見てみることにしよう⁶⁾。

「在るとは、対話的に交通することを意味する。対話が終わるとき、すべては終わる。だから、対話は終わることはありえないし、終わるべきでない」(Bakhtin, 2000, p.204)とか、「そもそも対話的關係というものは、構文上に表現された応答の言葉どうしの

関係よりもはるかに広い概念なのである。それは人間のあらゆることば、人間の生のあらゆる関係や発露、すなわち意味と意義をもつすべてのものを貫く、普遍的ともいえるような現象なのである」(Bakhtin, 2002b, p.51)という箇所からしても、これはバフチンの思想そのものであることはまちがいないのだが、ただしドストエフスキイ論では(ある意味では当然ともいえようが)ほぼ決まってドストエフスキイ自身の芸術観を説明するものとして出てきており、区別がむずかしい。

「対話」という言葉が頻出するようになるのは『ドストエフスキイの創作の諸問題』であり、そこには対話にからんだ言葉が数多くでてくる。

外的対話、内的対話、自己目的としての対話、手段としての対話、戯曲の対話、告白的な対話、論理的対話、隠れた対話、プロットを展開させる対話、哲学的対話、公然とした対話の遮り、主人公と自分自身との対話、内的対話化、自意識の対話化、全面的な対話化、対話原理、内的に対話化された言葉、対話化されたモノローグ、出口のない対話の対立、対話的に向けられる、対話的態度、対話的応答、対話的關係、対話的対立、意識の対話的分裂、対話的言葉(「対話の言葉」)、融合することのない意識どうしの対話、対話学、ヨブの対話、福音書の対話……

しかし、バフチンはこれでも対話原理を説くのに不十分であるとみたのか、ポリフォニーの場合と同様、『ドストエフスキイの詩学の諸問題』で大幅に追加をおこなっている。

大きな対話、ポリフォニー的対話、問題性をはらんだ対話、心に染み入る対話、客体的対話、修辭的対話、構文的に表現された対話、時代の対話、世界的対話、対話は非完結的なもの、対話的能動性、対話的出会い、対話的な生、対話的立場、イデーの対話的性格、真理の対話的性格、言葉の対話的性格、対話圏、意識の対話的存在圏、対話的呼びかけ、対話的視野、対話的アプローチ、対話的視点、対話的相互作用、対話的世界感覚、対話的交通、対話的接触、対話的抵抗、ルキアノスの対話、死者たちの対話、ソクラテスの対話、敷居上の対話、対話的な基盤、対話的文化、ヨーロッパの芸術的散文の発達における対話的路線、対話的シンクリシス、宴席での対話の言葉……

こうした補強で目立つのは、カーニバル論絡みの時

間的・空間的に大きな対話の追加と同時に、まさにあらゆるものが対話的關係のなかにあるのだと言わんばかりの対話原理の強調である。真理やsoglasieについてもつぎのように述べている。

真理は個々人の頭のなかに生まれ存在するものではない。それは、ともに真理を探し求める人びとのあいだにおいて、人間どうしの対話的の過程で生まれてくるものなのだ。(Bakhtin, 2002b, p.124)

強調しておくが、ドストエフスキの世界においては、soglasie もまた対話的性格を保っている、つまり、モノログ世界に見られるように、複数の声と真実を単一の無人称の真実へと融合させることはけっしてない。(Bakhtin, 2002b, p.108)

「対話的真理」、「対話的soglasie」というのは、見方によっては撞着語法なのであろうが、バフチンからすれば、それはモノログ的立場ゆえの錯誤でしかない。

また、大きなスケールの「カーニバルの対話」とは対照的ともいえる「心に染み入る対話」の強調も眼を引く。

人格の真の生は、それに対話的に染み入ってはじめて捉えられる。そのとき、真の生はみずからこちらに応え、自由^に自己を開いてみせるのである。人間に関して、その者に対話的に向けられないまま他者の口から語られる真実、すなわち本人不在の真実は、もしそれがその者のもっとも〈神聖なる部分〉、すなわち〈人間の内なる人間〉に触れている場合には、その者をおとしめ、ほろぼす虚偽となる。(Bakhtin, 2002b, pp.69-70)

すでに『ドストエフスキの創作の諸問題』でも少し触れられてはいたが、このように〈人間の内なる人間〉についてかなり加筆がなされている。内的対話、つまり内なる自己との対話のなかで葛藤している者に対して、その者が内なる言葉を「外言」化できるようアドバイスする対話、すなわち「心に染み入る対話」の意義と、それに伴わざるをえない緊張感、さらには危険性が指摘されている。「対話的能動性」の最たる

ものがこの場合は必要とされる。

さらにはまた、イデーも意識も間個人的なものであることが、言葉と重ね合わせながら、改めて説かれている。

芸術家ドストエフスキが見たイデーとは、人間の頭のなかに〈定住〉している主観的な個人心理学的な産物ではない。そうではなく、イデーとは間個人的、間主観的なものであり、その存在領域は個人の意識ではなく、意識どうしのあいだの対話的の交通なのである。イデーとは、2つ以上の意識が対話的に出会う点で展開される、生きた出来事なのである。その意味でイデーは言葉と似ている。(Bakhtin, 2002b, p.99)

ドストエフスキの主人公たち……それぞれの思考は、当初から、みずからを未完の対話の応答の言葉と感じている。(Bakhtin, 2002b, p.41)

ドストエフスキの作品——それは、言葉についての言葉であり、言葉に向けられている。ここでは、描かれる言葉が、描く言葉と、おなじひとつの地平で同等の権利をもって出会う。(Bakhtin, 2002b, p.297)

「言葉」に対するこうした捉え方は、『マルクス主義と言語哲学』とほぼ重なり合っている。全体に、バフチンの対話論の成立過程からしても、言語論抜きにはバフチン特有の対話論は生まれなかった可能性が高い。以下では、その辺の過程を手短かに振り返っておこう。

まず、「行為の哲学によせて」(執筆年不明、1918-24年?)という題で没後に刊行されたこの草稿であるが、ここには「対話」という言葉自体は出てこない。ここで際立っているのは、「理論的」と「参加的」の対置である。「理論的」世界は、「生きた唯一の歴史性とは無縁の」抽象的で自己法則的な世界である。「理論的認識の対象としての世界は、みずからが世界全体であるかに装おうとする。抽象的で単一の存在であるだけでなく、その考えられうる全体のなかで具体的な唯一の存在でもあるかに装う」との批判は(Bakhtin, 2003, p.12)、のちに展開される「モノログ支配」批

判を想起させる。

これに対して、「uchastnyi (参加的)」意識は「唯一の存在＝出来事」へと人を関わらせる。ちなみに『ドストエフスキイの創作の諸問題』には、「対話的な、souchastnyi (共・参加的) 志向のみが、他者の言葉を真剣に受けとめる」(Bakhtin, 2000, p.55) という箇所がある⁷⁾。

さらには、「唯一無二の価値をもった個人的世界が多数あるということは、内容面で一定して既成のものであり凝固しているものとしての存在を破壊してしまうはずなのだが、だがまさにこの多数性があるてはじめて、単一の出来事がつくりだされるのである」との主張は (Bakhtin, 2003, p.43), 先にあげたポリフォニーの定義、「複数の自立しており融合していない声や意識、すなわち十全な価値をもった声たちのポリフォニー」に相通じる面を有している。

つぎに、やはり没後に「美的活動における作者と主人公」という題で刊行された草稿 (執筆年不明, 1921-24年?) では⁸⁾、「劇」, 「叙事詩」, 「抒情詩」などがとりあげられているが、これらがモノログ的であり小説は対話的であるといったような対置はまだ見られない。ただ、劇は「単一のリズムが……すべての発話にある種の単一的トーンを付与し、それらの発話をいわば1個の情動・意志的な分母によって通分している」といったように (Bakhtin, 2003, p.76), そのモノログ性が指摘されていたり、あるいはまた、叙事詩においては「どの言葉も、反応への反応、主人公の反応に対する作者の反応を表現しており、どの概念、イメージ、対象も、二重のレベルで生きており、2つの価値的コンテキスト、主人公のコンテキストと作者のコンテキストのなかで意味づけられている」といったように (Bakhtin, 2003, p.77), 「二声性」も指摘されている。抒情詩に関しても「反応に対する反応」が指摘されている。だが、いずれの詩に関しても、対話原理の決定的基準となりうる「作者と主人公の対等な関係」に関する言及はまだない。

このように、1920年代前半のバフチンは、「出来事への参加」を重視する立場から同時代の「理論主義」を批判しながらも、それに代わる「出来事」的「理論」を具体的に対置できずにいた。そうした状況を打開するのに決定的な役割を果たしたのが「発話」論の

導入である。すでに、1924年に発表予定であった「言語作品の美学の方法論の問題に寄せて」では⁹⁾、フォルマリストの詩的言語論が立脚していた当時の言語学を批判して、個々の具体的な発話という「出来事」を扱うべきであるとしている。だがこうした変化が明確に見てとれるのは、ヴォロシノフ名で出た「生活のなかの言葉と詩のなかの言葉」(バフチン, 2002a/1926) であり、ここではすでに対話的な言語交通論が展開されている。このあたりからバフチンの論には、人格主義、実存主義的立場に加えて、言語の問題が鮮明に入ってくる。またそれとともに「社会」も判然と導入された。

総体としての〈芸術的なもの〉は、モノのなかや、孤立してとりだした作家の心理のなかや、観照者の心理のなかにあるのではない。〈芸術的なもの〉は、これら三つの契機すべてをふくんでいるのである。それは、芸術作品のなかにとどめられた、創造者と観照者の相互関係の独特な形式なのである。……芸術作品の素材のなかの実現され、とどめられた社会的交通のこの独特な形式を理解することこそ、社会学的詩学の課題である。
(バフチン, 2002a/1926, p.248)

バフチンの「社会学的詩学」は細部にまで「交通」を読みとる繊細なものであった。「言葉と非・言葉、言われたことと言われなかったことの境界」にあるイントネーションもふくめ、「現実に発せられた (あるいは意味をもって書かれた) あらゆる言葉は、話し手 (作者)、聞き手 (読者)、語られる誰か (主人公) や何かといった三者の、社会的相互作用の表現であり所産である」ことを強調している (バフチン, 2002a/1926, p.255)。

この段階で、作者以外に主人公と読者が加えられると同時に、作者以外の二者——主人公と読者——の役割が大きく高まってきている。すでにここでは、たとえば「主人公と作者の親密度」や「主人公のヒエラルヒー一面での価値」が云々されるなど、ポリフォニー論の成立を予想させるような姿勢が認められる。また、もうひとつ注目すべきは、このような作者と主人公の関係が、これら二者の関係ではなく、つねに「第三者 (聞き手) を考慮に入れており、その聞き手が、作品

の全契機にきわめて本質的な影響を与える」との見解である（バフチン、2002a/1926, p.263）。聞き手を相互関係のなかに組み入れただけでなく、その聞き手にも「能動的な」位置を認めたことによって、バフチン特有の動的な社会的相互作用論が本格的に展開されることになる。こうした動的な捉え方が、内的に社会的な開かれた「社会学的詩学」観を形成している¹⁰⁾。もっとも、ここでは「対話」という言葉自体は使われていない。

「対話」という言葉がモノローグの対として明確に使われるようになるのは、やはりヴォロシノフ名で出た『マルクス主義と言語哲学』である。近代の「モノローグ」言語学は、バフチンによれば、「文献に保存されている他者の死せる言語の研究」をおこなっているために生じたものであり、そのため、「あらかじめ応答を排除した受動的な理解」を前提としている。これに対して、対話こそが言語的相互作用のきわめて重要な形式であるという。またそれと同時にバフチンは、実際にはどんなタイプの言語的通信も対話なのであるとみなしている。書物のような印刷された言語的表出も言語的通信の要素となっている、となれば広義での対話は、モノローグ的発話も、あるいはまた文献すらもふくんでいることになる。たとえば、モノローグ的発話の諸パラグラフは内発話の諸単位に似ているという。

さらには、「生活のなかの言葉と詩のなかの言葉」の段階とはちがって、交通＝相互作用の重視にとどまらず、コンテクストの方向が異なることや、多アクセント性、言葉に対する言葉の能動的な反応などにも注目が払われている。とくに言葉に対する言葉の能動的な反応は強調されている。「対話の研究を裏もいものとするには、まず、他者のことばの伝達形式の研究が深められなければならない。それらの形式のなかには、他者のことばの能動的知覚の基本的な傾向が反映されているからである。また、対話にとってもこの知覚が基本となっているのである」（バフチン、1989/1929, p.138）。こうした姿勢はドストエフスキ論と完全に重なり合っている。

先にも触れたように、『マルクス主義と言語哲学』は、同年に出た『ドストエフスキの創作の諸問題』と、対話論に関して大いに重なりあうと同時に、『ド

ストエフスキの詩学の諸問題』のメタ言語学部分の先駆ともなっている。いずれにせよ、ドストエフスキ論と『マルクス主義と言語哲学』は、対象領域を分担し合い、対話原理を相補的に強固なものにしたといえよう。もっとも、『ドストエフスキの詩学の諸問題』においては、先にも述べたように、削除部分があるため、『マルクス主義と言語哲学』との関係がやや見えにくくなっている。そこで、こうした点にも注目しながら、つぎに2つのドストエフスキ論を比較してみることにしよう。

3 『ドストエフスキの創作の諸問題』と『ドストエフスキの詩学の諸問題』

『ドストエフスキの創作の諸問題』で展開した対話原理に、『ドストエフスキの詩学の諸問題』でカーニバル的対話が加えられたことを否定的に見る者は、ボネツカヤ（Bonetskaia, 1966）をはじめとして少なくない。そのような立場からすれば、「カーニバル化は、大きな対話の開かれた構造を可能にし、人びとの相互作用を精神と知の高次の領域へと移すことを可能にした。……カーニバル的世界感覚は、ドストエフスキが倫理的独我論だけでなく認識論的独我論をも克服することを助けている」という一節も（Bakhtin, 2002b, p.201）、「唯一性」重視から始まったバフチン特有の対話原理を台無しにしているとしか思われぬ。

ただ本稿では、このように増補された部分ではなく、逆に『ドストエフスキの創作の諸問題』にだけあった部分に注目したい。まず眼に入るのは、序と結語が全面的に書き換えられていることである。これらの箇所には「社会（学）的」色彩が濃厚に出ている。

われわれの分析の基礎にあるのは、あらゆる文学作品は内面的、内在的に社会学的であるとの確信である。作品のなかでは生きた社会的諸力が交差しあっており、作品の形式の各要素は生きた社会的評価に貫かれている。したがって、純粹に形式的な分析も、芸術的構造の各要素を、生きた諸々の社会的諸力の屈曲点と……みなすべきである。（Bakhtin, 2000, p.201）

また、それ以外の箇所でも、「社会的」ないし「社会的」云々が消えてしまったケースがいくつかある。また、「社会的であり、出来事的である」(Bakhtin, 2000, p.60)とあったのがただ「出来事的である」となっているようなケースも見られる。さらには、「言葉の社会(学)」を「メタ言語学的研究」に代えている場合もある。

こうした変更は、バフチンのいう「社会(性)」とは声・意識どうしの対話であって、対話が「社会性」の唯一の担い手となっていることからすれば、実質的には大きな影響を与えるものではないともいえるが、すくなくとも表面的には、「社会(学)性」が後退したことに変わりない。こうした変更がなければ、『マルクス主義と言語哲学』との近さはもっと見えやすいままであったろう。「社会(学)性」は『小説の言葉』(1934-35)の段階でも目立つが、その後はさほどでない。ただ興味深いことに、1961年の覚書には「社会性」が出てくる。

内面的なものすべても、自足することはなく、外に向けられ、対話化されており、どの内的体験も境界上にあらわれ、もうひとつの体験と出会うのであって、この緊張した出会いのなかにその本質全体はある。これは(外的でもモノ的でもない内的な) 高次の社会性なのである。(Bakhtin, 1996b, p.344)

もっとも、ここでもバフチンの言いたいのは、社会決定論ではなく、内なる社会性である。

『ドストエフスキの詩学の諸問題』においてやはり見えにくくなってしまったものとしては、注1に記したように、現象学的視点もあげられる。すなわち、社会(学)的視点と現象学的視点のいずれも、少なくとも用語としてはほぼ消えてしまったことになる。

さらにもうひとつ興味深いのは、「聖書の対話」、「福音書の対話」、「ヨブの対話」が出てくる箇所が外されたことである。

声どうしの相互作用という出来事がドストエフスキにとっての最終的所与なのである。この点で、ドストエフスキの対話はプラトンの対話と

異なる。プラトンの対話は、全面的にモノローグ的で教育的な対話ではないにしても、やはり声の多数性がイデーのなかで解消されてしまっている。イデーをプラトンは出来事ではなく存在として考えている。……ドストエフスキの対話をプラトンの対話と対照させること自体が、われわれにはそもそも重要ではないし生産的でもないように思われる。ドストエフスキの対話は純粋に認識論的、哲学的な対話ではけっしてないからである。ドストエフスキの対話を聖書や福音書の対話と対照させたほうが、より重要であろう。ヨブの対話や福音書のいくつかの対話がドストエフスキにあてた影響には、議論の余地がない。これに対してプラトンの対話はまったくドストエフスキの関心外にあった。ヨブの対話は、その構造からして内的に果てしない。というのも神に対する魂の——闘争したり、控えめな——異議申し立てが、必須で永遠のものとして考えられているからである。ただし、聖書の対話も、ドストエフスキの対話のもっとも重要な芸術的特性にはわれわれを導かない。(Bakhtin, 2000, p.173)

ここで興味深いのは、プラトンの対話と聖書の対話のいずれかがドストエフスキの対話に近いかということではない。いずれもドストエフスキの対話の芸術的特性を明らかにするには不十分であることに変わりはない。注目すべきは、ここでも、ヨブの対話のような「内的に果てしない」構造、「必須で永遠の」「異議申し立て」が、「教育的な対話」に對置されていることであろう。

これに対して『ドストエフスキの詩学の諸問題』では、民衆的・カーニバル的基盤の上にある〈ソクラテスの対話〉が評価される一方、ヨブの対話や聖書の対話はすっかり消えてしまっている。〈ソクラテスの対話〉という「ジャンル」の根本には、真理および真理をめぐる人間の思考が対話的本性をもつという、ソクラテス的考えが据えられている。真理探究の対話的方法は、既成の真理の所有を自負する公式モノロギズムと対立し、自分たちが何かを知っている、つまりなんらかの真理を所有していると考え人びとの素朴な自信とも対立していた」(Bakhtin, 2002b, p.124)。

1930年代に進められた文学史あるいは文化史の見直し作業が〈ソクラテスの対話〉のこのような再評価をもたらしたのであるが、他方でヨブや聖書の対話

を抹消した理由は必ずしも明確でない。

4 「ともに声をだすこと」と「さまざまな声があること」

ところで、バフチンは〈golos あるいは glas「声」〉およびそれから派生した語をよく使うだけでなく、みづから新語も編みだしている。名詞だけに限っても、mnogogolosost'「多声性」や odnogolosost'「単声性」、dvugolosost'「二声性」以外に nesoglasie, raznogolitsa, raznogolosost', raznoglasie, soglasie, so-glasie などがある。なかでも眼を引くのはハイフンのついた soglasie である。『ドストエフスキの創作の諸問題』では、soglasie は nesoglasie との組み合わせで日常的な意味で「同意・不同意」として使われているにすぎないのに対して、so-glasie は以下のように使われている。

ドストエフスキは、宗教的・ユートピア的な世界観のレベルでは対話を永遠のなかに移しており、永遠というものを永遠の so-radovanie, so-liubovanie, so-glasie とみなしている。他方、長編小説のレベルでは、こうしたことは対話の完結不能性、当初は無限の悪循環としてあたえられている。ドストエフスキの長編小説においてはすべてが、みづからの中心である対話や対話的対立へ向かって集まっていく。すべては手段であり、対話が目的である。ひとつの声はなにものをも完成させないし、なにものをも解決しない。2つの声が生のミニマム、存在のミニマムなのである。(Bakhtin, 2000, pp.156-157)

so-radovanie, so-liubovanie は so-「ともに……」を外しても、それぞれ「喜ばしいもの・こと」、「見とれること」のような意味があるが、so-glasie の場合は so-を外した場合は単語として存在しない。もはや日常的な意味での「同意」でないことは明白である。

一方、『ドストエフスキの詩学の諸問題』ではもはやハイフンなしの soglasie を、独自の意味をこめて2度使っている。そのうちのひとつは、社会評論家ドストエフスキがモノログ主義を克服していなかつ

たことを述べているパラグラフの最後に、さりげなく加えられたつぎのような但し書きである。

強調しておくが、ドストエフスキの世界においては soglasie もまた対話的性格を保っている、つまり、モノログ世界に見られるように、複数の声と真実を単一の無人称の真実へと融合させることはけっしてない。(Bakhtin, 2002b, p.108)

ドストエフスキは社会評論家の場合にしても、つまり soglasie を重視している場合にしても「対話的」であった、と微調整をしている。soglasie の問題をこの時期のバフチンが気にしはじめていたことは、『ドストエフスキ』への補遺と変更」やその他の覚書からも推測できる。そこには、「spor（議論）だけでなく soglasie もポリフォニー的たりうる。ただし、ポリフォニー的 soglasie は声たちを融合させないのであって、同一性ではないし、機械的こだまではない」(Bakhtin, 2002b, p.302)とか、「能動的理解（議論と soglasie）」(Bakhtin, 2002b, p.421)などとある。このように、議論だけでなく soglasie も重要だとするのは、日本的な対話観からすれば、言わずもがなの感じがしないでもないが、ひとつの理由としては、シクロフスキがその著『肯定と否定——ドストエフスキ覚書』(1957)においてドストエフスキの「議論」性を強調していたことへの批判が考えられる。「言わずもがな」といえば、つぎのような言い方もそう思われるかもしれない。

対話原理を議論、論争、パロディとみなす狭い見方。これらは対話原理の外見的にもっとも明瞭だが、荒削りな形式である。(Bakhtin, 1996b, p.332)

対話的關係を単純化したり一面化して、対立、bor'ba（闘争）、議論、nesoglasie（不同意）に還元してはならない。soglasie は、対話的關係のきわめて重要な形式のひとつなのである。soglasie は異種とニュアンスに富んでいる。(1996b, p.336)

ここまでくると、もはやシクロフスキ批判というよりも、バフチン自身、すなわち 1920, 30 年代の自分

の著作を念頭においた修正のようにも思われてくる。『ドストエフスキイの創作の諸問題』やとりわけ『小説の言葉』の脱中心的傾向を和らげようとしていたのであろうか。ともあれ、1960年前後のバフチンはこのように *soglasie* の意義をも重視しはじめていた。ポリフォニーや対話においては、議論だけでなく *soglasie* も見られるというのである。もっとも、*soglasie* が最高であるとまでは述べておらず、*soglasie* にもいろいろあるとしているにすぎない。もっとも危惧していたのは、*soglasie* が議論や闘争にくらべて（モノローグ的とまでいかにないにしても）受動的なものと捉えられることであつたらう。

ちなみに、先ほどの *so-* の使い方でもまず浮かぶのは「*sobytie* (出来事)」である。これはハイフンなしであるが、「*bytie* (存在)ではなく *sobytie* (出来事)」といったようなフレーズによって、おのずと *so-* を際立たせ、「ともに・在ること *co-existence*」を想起させている。上記の引用にもどれば、*so-randovanie*, *so-liubovanie*, *so-glasie* は、バフチン (1968/1963) では「共に悦び、共に愛し、共にむつみ合う」、バフチン (1995/1972) では「ともに喜び、ともに愛し合い、ともに協和しあう」といづれも動詞的に訳し、「ともに」を明確にしている (英訳は *co-rejoicing*, *co-admiration*, *con-cord*)。問題は、ハイフンがない *soglasie* をどう訳すかである。「同意」とか「調和」、「賛同」(英語では *agreement* や *concordance*) などの訳語があてられているが、声が複数あって融合していない状態をあらわすのに不十分であることに変わりはない。

訳語のむずかしさということでは、『小説の言葉』に頻出する *raznorechie* もそうである。「単一の国語」が「社会的方言、集団特有の言葉遣い、職業的な隠語、ジャンルの言語、世代や年齢に固有の言語、潮流の言語、権威者の言語、サークルの言語、束の間の流行の言語、社会・政治の世界の数日さらには数時間の言語に分化している」状態を意味するこの言葉は (Bakhtin, 1975, p.76)、いまでは英語文献経由で「異言語混淆」と訳されることが多いが、バフチン (1996a/1975) では「言語的多様性」(まれに「言語的矛盾」)と訳されている。

じつは、これとおなじように、「声」関係でもバフ

チンが *razno-* (*raznyi* 「さまざまな、相異なる」) を接頭辞的に使った言葉がある。先にあげた *raznogolositsa*, *raznogolosost'*, *raznoglasie* などがそうである。最初の2つは「さまざまな声がある状態」をあらわしているのだが、最後の *raznoglasie* は訳しにくい。

きわめて重要な対話的カテゴリーとしての *soglasie*。……*nesoglasie* は貧しく非生産的。より本質的なのは *raznoglasie*。それは、実際には、声の多様性と非融合性が保たれている *soglasie* へと引きつけられている。(Bakhtin, 1996b, p.364)

raznoglasie は、日常語として「(意見などの)不一致、対立」という意味で使われているのだが、バフチンはこの語を辞書にあるような意味では使っておらず、*raznorechie* の場合と同様に、*razno-glasie* という造語として扱っているものと思われる。不一致とか不調和ではなく、さまざまな声が複数あるということであり、そのため、まったく対話がない状態より勝っていることはもちろんのこと、議論や *nesoglasie* 「不同意」より、あるいはまた逆に「他者の言葉の敬虔な受け入れ」よりも勝っており、*soglasie* のすぐ間近に位置している。また、ポリフォニーには *soglasie* よりもむしろ *raznoglasie* のほうが近い。

この関係では、バフチンが「闘争」という言葉をよく使うことも想起すべきであろう。『小説の言葉』には、「内的に説得力のある言葉は、他の内的に説得力のある言葉と緊張した相互作用と闘争を開始する。われわれのイデオロギー的生成とは、まさに種々の言語的・イデオロギー的な視点、アプローチ、傾向、評価が支配を求めてわれわれの内部でくりひろげる、このような緊張した闘争なのである」とあり (Bakhtin, 1975, p.158)、また『マルクス主義と言語哲学』では、「それぞれのイデオロギー的記号のなかで多方向のアクセントが交差している。記号は階級闘争の舞台となっている」(バフチン, 1989/1929, p.31) ことが強調されていた。

「相互作用」・「交通」・「対話」と「闘争」のこうした並置は、1920-30年代に限らない。1953年末ごろに書かれていたとされる『「ことばのジャンルの問題」への覚書』にも、「話し手たちの対話的相互関係の独

特な諸形式（交通と闘争という出来事）」（Bakhtin, 1996b, p.207）や「対話、すなわちさまざまな個性の出会い、接触、闘争」（Bakhtin, 1996b, p.215）と記されており、「60年代から70年代初頭にかけての研究メモ」にも、「あらゆる言葉は、各人にとって、自分の言葉と他者の言葉に分けられるが、両者の境界は混同されることがあり、これらの境界上では緊張した対話的闘争が生じる」とある（Bakhtin, 1996b, p.406）。

『ドストエフスキイの詩学の諸問題』刊行の数年あとも、「理解しようとする者は、自己がすでに抱いている見解や立場を変える、あるいは放棄すらもする可能性を排除してはならない。理解行為においては闘争が生じるのであり、その結果、相互が変化し豊饒化するのである」（Bakhtin, 2002b, p.404）と記している。

ちなみに、この数行あとには、「能動的な soglasie-nesoglasie は（もしそれが教条的にあらかじめ決定されていないならば）、理解を刺激し深め、他者の言葉をいっそうしなやかで自立したものにし、相互の溶解や混合を許さない。2つの意識の画然たる区別、それらの対立と相互作用」と記されている（Bakhtin, 2002b, p.404）。soglasie「同意」であろうと nesoglasie「不同意」であろうと、「能動的」でさえあれば、理解を深めうるのであって、避けるべきは「溶解」や「混合」であるというのである。

こうした点を踏まえるならば、結局、バフチンの対話原理には、「ともに声をだすこと＝協働」と「さまざまな声があること＝対立」、この両面とも必須の条件であったといえよう。重要なのは、完全なコンセンサスを得ることではなく、相互開示が可能となるような状況をつくりだすことであった。

とはいえ、このようにつねに動的な相互作用を重視するバフチンの対話原理を実践するとすると、それはけっして容易な業でない。これにはたいへんな「緊張」や「能動性」、さらには対話的想像力が要求される。そうしてはじめて、対話も創造的になるというわけである。

では、カーニバル論はこうした対話原理とどのように関係づけられるのであろうか。そこにおいて、「ともに」と「さまざまな」の両面は保たれているのであろうか。『ドストエフスキイの詩学の諸問題』では、ヨブの対話や福音書の対話に代わってソクラテスの対

話がカーニバル論とからめて評価されていることはすでに見たが、そこにはつぎのような記述がある。

ソクラテスが思考と真理の対話的本性を発見したというそのこと自体、対話に加わった人びとどうしのカーニバル的な無遠慮な関係と、人びと間のあらゆる距離の廃棄を前提としている。そればかりか、いかに高貴で重要であるかに関係なく思考対象そのものへの無遠慮な関係、そして真理そのものへの無遠慮な関係を前提としているのである。（Bakhtin, 2002b, p.149）

これに限らず、バフチンがカーニバル論を展開するときには、あるいはまた小説論一般のときにも、このように「距離の廃棄」がもつ意義が強調されている。ことに、笑いによる解放のイメージに満ちあふれた『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』では、そうである。そこでは、束縛を解かれた「自由な人間どうしの無遠慮な接触」が礼賛されている（ただし、『ドストエフスキイの詩学の諸問題』では、カーニバル論を追加する一方で、「距離」のとり方に格別の緊張を要する〈人間の内なる人間〉についてもかなりの増補をおこなってはいる）。結局、「距離」に関するこうした両義性をバフチンは最終的に「解決」しておらず、「カーニバル化は大きな対話という開かれた構造を可能にした」というだけであった（Bakhtin, 2002b, p.201）。

たしかに、カーニバルでは人びとは「一時的に」せよ「融合」に限りなく近い状態を経験している。このため、バフチンの対話原理は評価してもカーニバル論には否定的な者もいるが、カーニバル論にはポリフォニー論と共通する重要な特徴がすくなくともひとつはある。それは「自由」の擁護ということである。また、対話原理との共通点もないわけではない。それは、相互作用をとおして互いが「変化」ということである。「生活のなかでは見通しのきかない階層的な柵によって分け隔てられている人びとが、カーニバルの広場では自由でくつろいだ接触をもつ」のであって、「ひととひととの相互関係の新しいあり方がつくりだされる」のである（Bakhtin, 2002b, p.164）。その意味では、バフチンは距離の一時的廃棄がもつ肯定面を積極的に取りこもうとしたともいえよう。

ただし、それはあくまでも一時的なものであって、やはりバフチンの対話原理の美点は独特の「距離」のとり方にあった。「内的人間は、内的人間と融合したり、内的人間に感情移入することによっては、把握できない」というのも (Bakhtin, 2000, p.156), そうした例のひとつである。あるいはまた、「対話的に呼びかける」ことの重要性を説きながら、つぎのように述べている箇所もある。

内的な対話的姿勢があるときにはじめて、わたしの言葉は他者の言葉ときわめて緊密にむすびついている。だが同時にまた、他者の言葉と融合することなく、他者の言葉を呑みこみもせず、その意義をみずからのなかに溶解させたりはしない、つまり他者の言葉の言葉としての自立性を完全に保っている。緊張した意味的結びつきのもとで距離を保つのは、けっして容易な業ではない。だが距離は作者の構想のなかに入っている、というのも距離だけが主人公の描写の完全な客観性を保証するからである。(Bakhtin, 2000, p.55)

晩年にも、「距離の保持は、客体が主体となり、それが問いかけたり答える場合にも、巨大な意義を有している」(Bakhtin, 2002b, p.381)と記している。

対話原理の究極の働きともいえる「心に染み入る言葉」、つまり「他者の内的対話に能動的に確信をもって介入し、他者が自分自身の声に気づくのを促す」言葉も (Bakhtin, 2000, p.144), この「距離」をとれる能力しだいということになろう。あるいはまた、モノログではなく「内的に説得力のある言葉」もまた、この「距離」に対する能力にかかっている。バフチンは、「小説の発達とは、対話性の深化、拡大、洗練にある。……対話が分子の深み、さらには原子内の深みにまで達していく」と述べているが (Bakhtin, 1975, p.113), ここでいう「小説」を「私たち」に置き換えてもいいだろう。私たちの身体の隅々にまで「対話」が「染み入って」はじめて、他者に対しても「心に染み入る言葉」が発せられるのであろう。

以上、バフチンの対話原理の特徴を再検討してみた。その結果改めて確認されたのは、バフチンの思考全般に特徴的な「両面価値性」である。この言葉自体は、

バフチン自身が「カーニバルの笑い」の特徴としてあげているものであるが、これは対話原理にも十分あてはまるものと思われる。soglasie と raznoglasie の関係についてもそうである。バフチンは、ややもすると相対主義に堕しかねないこうした「両面価値的」状態にこそ、活路を見いだそうとしているかのようだ。そのために欠かせないのが「対話的能動性」である。ある意味ではきわめて危うい動的關係のなかにつねに身をおきながら「能動的」に他者と交わるのが、バフチンの本領といえようか。今日では、心理学、教育学その他の分野においても「対話的アプローチ」が当然のものとして取り入れられ、また「インタビュー」も活発に試みられているように見える。それらが他者との「両面価値的」関係のなかでなされる困難な作業であることも、想像に難くない。本稿の筆者としては、その際に、「心に染み入る対話」をはじめとするバフチンの対話原理がなにがしかのヒントになれば幸いである。ちなみに、対話原理を実際に活かすには、本稿ではとりあげなかった「カーニバルの笑い」と組み合わせた際の可能性なども、検討に値しよう。

注

- 1) 日本語訳には、バフチン (1968) とバフチン (1995) がある。いずれも 1963 年版からの訳であるとしているが、後者は 1972 年版 (あるいは 1979 年版) を底本としている可能性がある。バフチンは改訂増補版を出すにあたり、現象学的色彩の濃い「intentsional'nost' (志向性) ← Intentionalität」と「intentsiia (志向)」, ならびにそれからの派生語を、「廃語」という理由で約 80 箇所において別のいろいろな語に置き換えたが、1972 年版では 2 箇所だけ元にもどしている。これらの箇所の訳が、バフチン (1968) では「作者の理解の客体」、「主人公の言葉の直接対象に向けられる度合いが強まるにつれ」となっているのに対し、バフチン (1995) では「作者の意図の客体」、「主人公たちの言葉が直接的な対象指示の度合いを強め」となっているのは、そのためであろう。intentsiia, intentsional'nost' にこだわって 1972 年版を直訳すれば、「作者の志向の客体」、「主人公の言葉が直接に対象を志向している度合いが強まるにつれ」となるか。
- 2) この「融合していない」の強調を、キリスト教との関係から説明する見解もある。代表的文献としては

- ミハイロヴィチ (Mihailovic, 1997) があげられよう。
- 3) ただし、インタビュー「ドストエフスキイのポリフォニー小説について」では「ポリフォニー的で多声的な小説」という言い方も記録されている (Bakhtin, 2002b, p.458)。
 - 4) 「出来事 *sobytie*」は、バフチンの著作のほぼすべてに見られるキーワードのひとつである。英語には通常 *event* と訳されている。「芸術的出来事の参加者としての作者と主人公」、「生きた出来事としてのイデー」、「交通と闘争という出来事」、「声どうしの相互作用という出来事」、「体験という出来事」、「対話的出来事としての発話」、「テキスト間の対話的出来事」、「理解という出来事」、「出来事としての対話」、「出来事としての言葉」、「出来事としての真理」等々、じつにさまざまに用いられているほか、それから派生した形容詞も「出来事的関係」といったように使われている。また、初期の「行為の哲学によせて」では、「出来事 *sobytie* としての存在 *bytie*」とか「存在という出来事」という言い方でもって、存在というものがつねに現実の生成のなかにあることが強調されている。ちなみに、*sobytie* は語源的には *so* 「ともに」 + *bytie* 「存在」と分解可能なため (*co-existence*)、「出来事」は「ともに在ること」、すなわち人格と人格の相互関係そのものを重視しているもとれる。バフチンによれば、世界のなかにその一部として出来事があるのではなく、個々の人格の貴重な唯一無二の世界どうしの相互作用として世界はある。この意味で、ポリフォニー小説の統一性も、世界ではなく出来事である。ちなみに、バフチン自身は「美的活動における作者と主人公」の第4章「作者の問題」において、「存在という出来事」は「現象学的概念である」と述べている (Bakhtin, 2003, p. 246)。
- こうした「出来事」観とも関連して、バフチンは「統一(性) *edinstvo*」(英訳 *unity*) という言葉も独特の意味で用いており、とりわけ初期の著作では「唯一性」と不即不離の関係におかれている。
- バフチンのいう「出来事」のこうした多義性に詳細に検討を加えたシチトツォヴァ『バフチンの哲学における出来事』(Shchittsova, 2002)によれば、バフチンは「出来事」に関する本質的な特徴・定義として、生・生成・体験・事実性・歴史性などの概念を用いている (p.20)。
- 5) 全体で約 560 頁からなるバフチン (1995) でいえば、約 150 頁がカーニバル論で追加された部分、約 80 頁がポリフォニーや対話で追加された部分である。
 - 6) ポリフォニーと対話は区別されるべきだが、厄介なことに、ポリフォニーの反意語として「ホモフォニ

- 一」とならんで「モノローグ」が使われているケースもある。「ポリフォニー的な世界を構築し、既存のヨーロッパ的な、基本的にモノローグ的(ホモフォニー的)な小説を破壊する」(Bakhtin, 2002b, p.13)。
- 7) *souchastnyi* という形容詞は、日常語としては「共犯の、共謀の」という意味をもっている。バフチン (1968) では「協働的」、バフチン (1995) では「共同作業への志向」と訳されている。
 - 8) 「行為の哲学によせて」と「美的活動における作者と主人公」をバフチンが生前に発表しなかった理由は定かでない。ポリフォニー論や対話論がまだ構築されていない段階の習作とみなしていた可能性もある。
 - 9) 「言語芸術作品における内容、素材、形式の問題」という題で 1975 年に公刊され、日本語にもそのように訳されているこの論文は、バフチン (2003) では、草稿等の再検討により、改題されるとともに、数行の追加や節番号が付されている。
 - 10) 「聞こえていること」のもつ意味は、「1961 年。覚書」では、話し手は通常の意味での聞き手のほかに、もうひとりの聞き手を念頭に入れているが、この「(第三者)はけっして神秘的とか形而上学的なものではない(一定の世界観のもとではこのような表現もありうるのだが)。……それは言葉の本性から出てくるものであり、言葉は聞こえるものでありたいとつねに願ひ、応答的理解をつねに求めていて、身近な理解にとどまることなく、どんどん遠くへ(果てしなく)進んでいく。……〈聞こえていること〉それ自体、すでに対話的な関係となっている」と記されている (Bakhtin, 1996b, p.338)。

引用文献

- バフチン, M. M. (1968). ドストエフスキイ論——創作方法の諸問題 (新谷敬三郎, 訳). 東京: 冬樹社. (Bakhtin, M. M. (1963). *Problemy poetiki Dostoievskogo*. Moscow: Khudozhestvennaia literatura.)
- Bakhtin, M. M. (1975). *Voprosy literatury i estetiki*. Moscow: Khudozhestvennaia literatura.
- バフチン, M. M. (1989). マルクス主義と言語哲学——言語学における社会学的方法の基本的問題, 改訳版 (桑野隆, 訳). 東京: 未来社. (Voloshinov, V. N. (1929). *Marksizm i filosofiia iazyka: Osnovnye problemy sotsiologicheskogo metoda v nauke o iazyk.*, Leningrad: Priboi.)
- バフチン, M. M. (1995). ドストエフスキイの詩学 (望月哲男・鈴木淳一, 訳). 東京: 筑摩書房 (ちくま学芸

- 文庫)。(Bakhtin, M. M. (1972). *Problemy poetiki Dostoevskogo*. Moscow: Khudozhestvennaia literatura.)
- バフチン, M. M. (1996a). 小説の言葉 (伊東一郎, 訳). 東京: 平凡社 (平凡社ライブラリー). (Bakhtin, M.M. (1975). Slovo v romane. In Bakhtin, M.M. *Voprosy literatury i estetiki* (pp.72-233). Moscow: Khudozhestvennaia literatura.)
- Bakhtin, M. M. (1996b). *Sobranie sochinenii, Vol.5*. Moscow: Russkie slovari. [1940年代から60年代初頭の著作を収録しており, 全体の4分の1近くは、『ことば対話 テキスト』(新谷敬三郎・伊東一郎・佐々木寛, 訳). 東京: 新時代社, 1988年. に日本語訳が収められている3点の著作「ことばのジャンル」, 「テキストの問題」, 「ドストエフスキー論の改稿プランによせて」とかなり重なっている]
- Bakhtin, M. M. (2000). *Sobranie sochinenii, Vol.2*. Moscow: Russkie slovari. [『ドストエフスキーの創作の諸問題』(1929)のほか, トルストイ論, ロシア文学史講義録などが収録されており, そのうち「トルストイの劇作品について」と「トルストイの『復活』について」は日本語訳があり, ミハイル・バフチン全著作第5巻(伊東一郎・北岡誠司・佐々木寛・杉里直人・塚本善也, 訳). 東京: 水声社, 2001年. に収められている]
- バフチン, M. M. (2002a). 生活のなかの言葉と詩のなかの言葉——社会学的詩学の問題によせて. 桑野隆・小林潔 (訳), バフチン言語論入門 (pp.7-54). 東京: せりか書房. (Voloshinov, V. N. (1926). Slovo v zhizni i slovo v poezii: K voprosam sotsiologicheskoi poetiki. *Zvezda*, 6, 1926.)
- Bakhtin, M. M. (2002b). *Sobranie sochinenii, Vol.6*. Moscow: Russkie slovari i Iazyki slavianskoi kul' tury. [日本語訳のある『ドストエフスキーの詩学の諸問題』が全体の3分の2を占めている。そのほか, 「1970-71年の覚書」, 「人文科学方法論ノート」という題で訳され, 『ことば対話 テキスト』(新谷敬三郎・伊東一郎・佐々木寛, 訳). 東京: 新時代社, 1988年. に収められている2点の著作と重なる部分も含まれている]
- Bakhtin, M. M. (2003). *Sobranie sochinenii, Vol.1*. Moscow: Russkie slovari i Iazyki slavianskoi kul' tury. [1920年代の美学関係の著作が収録されており, ほぼ全体が, ミハイル・バフチン全著作第1巻(伊東一郎・佐々木寛, 訳). 東京: 水声社, 1999年. に収められている4点の著作「芸術と責任」, 「行為の哲学によせて」, 「美的活動における作者と主人公」, 「言語芸術作品における内容, 素材, 形式の問題」と重なっている]
- Bonetskaia, N. K. (1966). K sopostavleniiu dvukh redaktsii knigi M. Bakhtina o Dostoevskom. *Bakhtinskie chteniia*, 1, (pp.26-32). Vitebsk.
- Mihailovic, A. (1997). *Corporeal Words: Mikhail Bakhtin's Theology of Discourse*. Evanston: Northwestern University Press.
- Shchittsova T. V. (2002). *Sobytie v filosofii Bakhtina*. Minsk. Lovinov.

(2007.3.30 受稿, 2007.7.28 受理)